日本文学全集
44

川端康成
(二)

招魂祭一景・禽獣・虹・母の初恋・反橋
舞姫・名人・みずうみ・掌の小説(抄)・他

河出書房

川端康成（二）

カラー版日本文学全集　44

1971©

昭和四十五年九月二十日　初版発行
昭和四十六年十二月十日　再版発行

定価　七五〇円

著者　川端康成
発行者　中島隆之
印刷者　草刈龍平
装幀者　亀倉雄策

本文印刷　中央精版印刷株式会社
口絵印刷　凸版印刷株式会社
製本　加藤製本株式会社
製函　加藤製函印刷株式会社
本文用紙　本州製紙株式会社
クロース　日本クロス工業株式会社

発行所　株式会社　河出書房新社
東京都千代田区神田小川町三丁目六番地
電話　東京(292)三七一一(大代表)　振替　東京一〇八〇二

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

0393-331144-0961

目次

川端康成(二)
招魂祭一景……五
浅草の姉妹……一
禽獣……二四
虹……三四
母の初恋……三六
反橋……六九
しぐれ……七四
住吉……七八

舞姫……八五
名人……一九八
みずうみ……二三三
掌の小説（抄）……二八五

注釈　保昌正夫　三三三
年譜　保昌正夫　三四一
解説　入沢康夫　三四三
巻頭写真　関口賢次郎
色刷挿画　浅草の姉妹・虹　佐野繁次郎
貧獣・名人・みずうみ　加山又造
舞姫　稗田一穂

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

川端康成

(二)

招魂祭一景*

騒音がすべて*真直ぐに立ちのぼって行くような秋日和である。

曲馬娘*お光はもう人群に酔いしびれていた。乗っている馬が時々思い出したかのごとく片脚を上げなぞする度に、ばらばらに投げ散らかされた手足が、ふっと一所に吸い寄せられて、生き物らしい感じを喚びもどすが、直ぐ瞳の焦点を失ってしまう。――でも、ふと、遙か遠くの百姓爺の顔がはっきり目にとまったり、直き前に立ちどまった男の羽織の紐の解けているのが妙に気になったり、それさえ夢のうちのことのようでもあった。

お光には、靖国神社*の境内だけが気違いめいて騒がしく、その代り世の中がぴたと静まり返っているとも思える。数知れぬ人の頭が影絵に似て音なく動いている気もする。

馬の背のお光一人、寂しい所に置き残されて、泣き出すべきなのをぼんやり忘れていたようでもあった。

新栗を焼くかんばしい香いが急に鼻につく。食べたい。――ちょっと一事にまとまった心は疲れ果てた現の夢からお光を呼び醒ました。

すると*、がらがらがら、細かい金網の筒形器械を廻して大豆を炒る音も聞えはじめる。曲馬小屋の前の人通りを距てて、その器械を右手で廻しながら、おかみさんが息のぬけた空気袋のような乳房をあらわに、蛸頭の赤坊にふくませている。同じ露店に亭主が網の上の栗を長い金火箸で器用にころがしている。

栗と大豆の香いを吸うともなしに、お光はほうっと太息した。

その隣がゆで卵屋である。

鼻たれ小僧が二人、店先で口論している。

「何を！」一人が卵にふりかけてある塩を掴んで、相手の口に投げつけた。

「あっ！」他の一人は、

「べっ、べっ。」と辛いのを吐き出していたが、

「うめえや、……うまい、うまい」と変梃に情ない顔をして口のまわりをなめ出した。

「こらっ、畜生。」塩を盗まれた卵屋が立ちあがると、塩を投げた小僧は、卵屋にいいんと尻を突き出してから、なめていた相手の首元に腕をかけ肩組して人波に姿を消してしまった。

お光はちらと微笑み、こんなに押し合いへし合いながら人々は、見世物小屋の側ばかり眺めて、誰一人この小僧のすばしっこい働きに気づいていないと考えた。――と、大変なことがある。眼球の悪光している素的に耳の大きい鳥打帽の学生らしいのと、角帯ゆえ満更学生でもあるまい獅子鼻の若者とが、小屋の前囲いの横棒につかまりながら、さいぜんからお光の顔をみつめている恰好である。

思い設けぬ視線にまごついて照れた時、お光の心に辛うじて張りがよみがえって来た。

お光にけどられて、鳥打帽が角帯の袖をひいた。

――轡で繋がれた二頭の裸馬が、子供を一人ずつ乗せ、胴をすれすれに並んで円道をめぐって行く。お光は二頭の背に、子供の乗った後に両脚を踏み構えて、上身をこころもち前屈みに腰を引き、踵で調子をとりながら馬の足を早めさせる。お光の身と馬の足並との呼吸が合って来る時に、二人の子供を馬の背に立たせ、帯を握って差し上げ、一旦はお光の両肩に子供同士向い合って跨らせる。更に気合を計り、握る力を強め、うんと両腕を伸して二人をお光の両背に立たせる。子供が片手を結び合いながら、肩の上にしゃんと立って、お光の腕を頓

りに、右肩の子は右の手脚を、左肩の子は左の手脚を、ぴんと水平に拡げると、客の拍手が起る。その形のまま、拍手を浴びつつ馬上の三人は馬道を一二周する。子供が一挙に肩から馬の背へ飛び下りる。……少し前この曲芸をすまして、憩う間も客を呼ぶため、仮小屋の表に馬上の姿をさらしているのであった。

空馬が三頭、娘を乗せたのが二頭、小屋の前に並んでいた馬の一番右のがうなだれていた頭をあげ、列から離れて歩み始めた。

お光もそれに倣って手綱をひいた。

小屋の前を端から端に行き戻りして、ことさら行く人の目をそばだたせる為であった。

右端まで来た。隣りは八木節*の小屋である。

ちょいと出ました三角野郎が
ここにしばらく暫時の間……

木の台に立ち上って大太鼓のふちを叩きながら、男が声を張りあげている。大正踊の踊娘が五六人舞台に並んで、小屋内の客には後姿を、しかも腰から上を、肩にした絵日傘でかくして、踊を待っているのが、外から、曲馬小屋の右端まで来た馬上のお光にまで見える。ここでも小屋の表が大きな一枚幕になっていて、十分毎くらいに幕をあげさげして、踊子の花姿をみせびらかし、愈々踊が始まる時、鐸を合図に幕を下し、この娘等の踊が観たければ木戸をお払いなさいと言わぬばかりである。

左隣りは魔術小屋だが今は只では見せられぬ佳境らしく、表の幕は閉じられていた。

「お光さん。……しばらく。」

さっき、睨め顔の学生と角帯のいた前囲いの横棒に身を寄せて呼ぶ小柄の女を、お光はちょっと思い出せなかった。

「あんた大きくなったんで、分らなかったわ」再び言って、その女は両肘をしゃくるように一時に引いてみせた。その癖ではっと、

「あら、お留さん。」

お光は馬から飛び下りようと上身を斜に傾けたものの、靴下と続いた桃色のめりやすずぼんをはいた短く太い脚が、馬を離れると、いかに醜いかという念に思わず制せられたのか、そのまま馬の頭を向き変えて近づいた。

肝腎のお留はぽかんとお光を見上げたきりだった。

お光は馬の横腹に伸していた両脚を縮め、背で折りたたみ、前に身を倒して、右手で鬣を握り左手をお留のと並べて横棒にかけた姿で、間近に馬をとどめた。

「今どこにいるの。」

「日暮里。」

「矢張り源吉さんと一緒？」

「きまってるじゃないの。」と答えるどころか、うなずく気力も無さそうに、お留は黙っている。

「この頃どうしてるの？」

「……。」

「源吉さん何してるの？」

「……。」

「まあ！　この人は。……どうしたんだろう。白痴のようだわ。」と、お光は話しながら殆ど相手もみていない自分の眼に、疲れ果てた気力を集めて眺めると、元から小さいお留の顔は一層ちぢかみ、生際の薄い額ばかりてかてかして、眼がきょとんとしている。

「源吉さんと別れちゃったの？」

「いいえ。」

「日暮里にいるの？」

「ええ。」

「そう。」

今聞いたばかしのお留の居所をうっかり問い返したのに気づいて、きまり悪いお光なぞに、お留は一向無頓著らしかった。
「お光さん、大きくなったのね。いくつ？」
何か一事を考えている風にお留が真向からぼんやりみつめているので、お光は照れかくしに、左手を横棒から離して馬の首に廻し、頬をべったり馬の首につけた。
「お光さん、いくつになったの？」
「どうしたのよ。」
「ほんとにいくつ？」
「十七。」
「伊作さんまだいるの？」
「ええ、いるわ。」
「お光さん。……伊作なんかに騙されちゃ駄目よ。」
「だ――。」お光は、母の膝に眠って乗っていた電車に衝突された子供のように、どきんとして、
「だって、（何々）」と我にもあらず言訳しようとしたのを驚いてやめた。
「あいつは鬼だから。」
「ええ。」お光は知らず識らず右手に蠟を固く握りしめていた。
「きっと誰かに会えると思って来てみたの。」
「そう。」
「あんた大きくなったわね。」
「……。」
「つまらないでしょう。」
「そりゃ。」
「もう今の間にそんな商売やめるものよ。」
「ええ。」
「人間も馬臭くなっちゃおしまいよ。」
「ええ。」
「親の見られた恰好じゃないわ。」
どきんと胸うたれてから、屍人形のようなお留もまともに見ることが出来ず、眼には唯馬の皮がぼうと拡がっていたお光は、聞くともなしにうけごたえしているうちに、自身をいじらしく思う心がはびこって来た。
「お倉さんも出てるの？」
「お倉さん今日はお休み。」
「そう。」
「だけど、少しばかり観てゆかない？」
「観たってつまらないわ。」
「そうね。」
「お光さん。男のおもちゃになり出したらもうきりがないことよ。」
「……。」
「そしたら死んだも同然よ。」
「……。」
「誰かきめて早く抜け出しなさいね。」
「……。」
「わたし、八木節でも聞いて行くわ。」
お光の顔をみつめて考え出そうとしていたのはこれだけだ、これだけ言えば用はない、という風に、お留はすたすた立ち去った。
右隣りの小屋では、ちゃかぽこ踊の最中である。
お光が顔をあげると二人の話を人だかりして聞いている。さっきの鳥打帽と角帯が、またいつの間にか引き返して佇んでいる。
「おや！」悪夢にうなされて目覚めてみると自分の寝様を沢山の人に見られていたのが分った時のような心持で、お光は泣き笑い顔に身を起した。
「――だって、お留さん。伊作さんに騙されたって騙されなくったって、結局同じことだわ。何も伊作さん一人が……。」お光はお留を見送った。両脚を踏み構えて、上身をこころもち前屈みに腰を引き、踵

で調子を取りながら馬の足を早めさせる。——歩いているお留も、まだその姿が抜けないではないか。短い脚を拡げてよたよたするのは、馬に跨っている形ではないか、腰が後にずり落ちそうな浅ましいお留は、袷羽織がなかったら、目のあてられた後姿でなかった。

お光は瞼が熱くなった。

「——今しがたの子供のように、わたしもお留さんに肩馬されて、こわごわお留さんの頭にかじりついていた。お留さんの肩に立って脚も開いた。お留さんだって男のおもちゃになった。あんただって、その時、唯あきらめてたじゃないの。……」

外の馬上の二人は、お光お留の邂逅に殆ど素知らん顔で小屋の前を悠々往き復りしつづけていた。

その二頭の間に、お光は馬を乗り入れた。

相手がお留というのではない、でもいじめられていた相手を追っ払ってくれた母に慰められ甘やかされながら、考えるといじめられたもとは自分のいたずらなので、これから大人しくしましょうと自身に誓う場合の子供に似た純な心が滾々と湧いて来るようで、折り縮めた膝はなにゆえか気恥しくて伸ばせなかった。お光は世間尋常の女と同じく、裸馬の背にきちんと坐っていた。

お光の前を、わざわざはいからな芸名まで自分勝手につけたこの曲馬団の花形桜子が、つんと身を反らせ、足の尖にびんびん小唄を唄わせながら乗って行く。

「桜子さんだってそうだわ、意地を張って、男の顔を叩いたり、かみついて地団太踏んだって、同じおちだわ。伊作さんには初手からかなわない。……」なぞいろいろつぶやいて、お光は気休めを言ってみたが、——却って、初めて見物の前に出た小娘らしく、緑の葉に紅い花らしいのを散らした、腰のまわりと手首にひだを拵えた新しい乗馬着の身姿を恥らう心が抑え切れなかった。

ので、ぱたと上身を倒して馬の首を抱き、人々に見えぬ側の鬣の裏に顔をうずめた。——成程、馬の臭いがする。

臭いがする。——と思うと、「馬臭くなる。」と誡めたお留の出現にも、少し可笑しさが加わってくる。道化て一寸眼をあげると、なんとなく、前の凜々しい桜子が、お光に頼もしくてならなかった。

「さくらさん。」

威高くちらり桜子は振り返った。

「さくらさん、あの人知ってて？」

「元いたんでしょう。」

「ええ。」

「尻餅つきそうな恰好してたわね。」

「でも、永く馬に乗ってると、ああなるんじゃなくって？」

「いやなこと。中気病みか、きっとりゅうまちすでも患ってるんだわ。」

「まあ。」

「乞食みたいな風してたのね。」

「だけど、わたし等もあんなになるんだと心細いわ。」

「そりゃ、気性一つだわよ。」

胸に鎖附きの銀めだるを下げた桜子は、両端に窪みが出るくらいきっと結んだ深紅の脣と、それを守る下ぶれの頬に、驕慢の色を漂わせ、小屋の左端まで来たので、馬の頭をめぐらせた。

魔術小屋の前幕が外から覗けるように上っている。

桃色の上衣に青の下衣の女が、舞台でびいる壜から国々の旗を限りなく引っぱり出し、おしまいに大日章旗をばたばた飜している。その女が、旗ごとに、一つ二つと数える科を繰り返す度に、長い頤を一べん一べん、左右交る交る突き出しているのまで、お光は見とどけた。

頤が斜に落ちてしまいそうな、突き出す、——その真似を二三度、鬣の影でやってみると、ほうと心が明るくなった。

お光は顔を馬の右側から左側の影に移して、桜子に倣い馬をめぐらせた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

――お光の日々*、現の身が哀れに荒めば荒むほど、夢は美しくなりまさる。でも、もう夢と現との架け橋なんぞ信じはしない。そのかわり、望み次第の時に、天馬に跨り空を夢へ飛ぶのであった。……

ほうと明るんだ心に、尚も、

「でも、桜さんは、わたしのように、誰からも狐みたいだなんて言われやしない。それに、顔ばかりじゃない、桜さんも言ったわ、気性がちがう。」お光は夢のうちの自分に答えた。が、

「なに言っているのよ。この人は。」お光はつぶやいた途端、泣いた後機嫌直した子供のいたずらっ気で、ぴょいと、――丁度その時、小屋の前の中程、入口近くまで乗って来て、通行人に尻を向けて秣を食っていた空馬にすれすれ通った丁度その時だったので、膝頭に力を入れ、それに飛び移ってしまった。

「おや。この娘は！」

傍にいた親方のおかみは驚いた。

「おかみさん、お留さんが来ましたわよ。」

「分ってるよ。何だね、妙な真似して、お前は……。」

場所外れたお光の奇曲芸の間の悪さは、何と言ってもかくせなかった。

忽ちお光の夢はさめた。

それから半往復。――

さっと開かれた入口から、手綱をしぼって桜子が小屋内に駈け込んだ。

お光も軽く口笛吹いて馬を促した。

小屋の中央円形に敷いた板の上で曲芸を演じていた子供達が、鼠のように散った。

「ひゅう、ひゅう――。」

伊作が爽快な姿を真中に現わし、高く口笛吹いた。

馬ばかりとは言えない。――お光までが、その音で、しゃんと心を取り直すのであった。

伊作が長い革の鞭で激しく板を打ち、馬を追い立てた。革の鞭は桜子の馬を追っている。

二三周乗り廻し、こんどは曲芸のためにふたたび両脚を折りたたみ、お光は馬の背にきちんと坐った。

男二人が、幅二三尺の長い赤布の四隅をぴんと引っぱり、馬道に張って、道の両側に立っている。そこを乗り過ぎる時、馬は布の下をくぐらせ、娘は膝頭に力を入れてその上を飛び越し、下をくぐった馬の背と上を飛び越えた自分の膝とを布の前で合せて、再び駈けつづけるのである。

桜子が素早く飛んだ。

と、他事が目につく暇もなく、お光は布に足の尖をとられて、馬の背に両手をついた。不覚である。

伊作の眼が険しく叱っている。革の鞭はお光の馬を追い初めた。

第二の赤布は夢中に越えた。――覚束ない膝頭の力なのを、二人の男が気を利かせ、瞬間にぐっと布をうしろへ引いてくれたからだった。

お光にいやおう考える余裕も与えず、小鳥を掴み去る鷹のように、馬はどんどん駈けて行った。

それでも、お光は*知らぬ間に、次の曲芸のため馬の背に立つともなく立ちあがっていた。

桜子は燃えついた半楕円の針金の両端を諸手に持って、くるくるくる、独繩飛びを、駈け廻る馬の背で軽やかに演じている。焔で出来た楕円の額縁の中に画かれた女神のようだし、足の下から頭の上までをめぐる円光につつまれたかのごとくあてやかでもある。

お光の受け取った針金も火が楕円の尖まで燃え移った。その輪を縄飛びする時と同じ具合に、後から前に廻して、顔のあたりまで来ると、焔の音がぶうっと耳から、光が目から、今日に限って心まで通る

かと、ほいと手が鈍ってしまう。ひょうしを失い、うしろからやり直し、針金を足の下一くぐりさせると、こんどは馬だけ宙を飛んでいて、自分の足場がさらわれ目がまいそうだ。

桜子は半楕円を完全な焔の楕円に見せて、自分の姿がその中に包まれてしまう妙芸を続けている。

桜子の画く楕円がお光の眼にちらちらして、自分と調子が一つにならない馬の背に立っているのも危っかしくなった。

「ひゅう、ひゅう、ひゅう――。」伊作の口笛。

もう身を投げころばせて、足をばたばたただこねて泣いじゃくりたい衝動が、お光の心一ぱいに来た。

日毎幾度となく巧みに美しく繰り返すこの曲芸が、ほんとに出来ないのか、我儘から飛びたくないのか、この間からよくないからだに三日間の招魂祭の疲れが一時に出て自分が大病なのか、お光には何も分らなくなった。

ふらふらっとしたはずみに、焔を馬の眼の前に投げ出し、どんと尻を背に落してしまった。

驚いたお光の馬は前脚を高く上げて一散に駈け出した。桜子の馬に軽く腹をすった。

「あ、桜さんに追いついた、桜さんを追い越す。」――とこれだけをお光がはっきり思った途端、腹を触れ合った二頭の馬の小さいよろめきで、曲馬団の花形桜子は焔の円光諸共落馬した。

浅草の姉妹*

一

「飛行機はただ今着陸いたしますから、乗り後れんように、さあいらっしゃい、いらっしゃい。飛行機の乗心地知らんようでは、今の世に生きているとは言えません。断然よそにはない、お子様には科学教育、不景気も苦労も空の風に吹き飛ばされる。遊覧飛行、さあ、さあ、空から浅草の夜景を御覧下さい。」

口上も聞えぬほどやかましい、三四人の男が振るベルの音。

浅草仲見世*裏。曲馬などがよく小屋がけする空地。

今もこの直ぐ近くに、猫と鼠との曲芸団がかかっている。風の向きで時々聞えて来る、女の甲高い客寄せ声と、堅い板を拍子木で打つらしい音。それは、鼠の花道というか、鼠使いの少女が板の橋を叩いて、小さい俵や万国旗を運ぶ鼠をはげましているのだ。

「いやよ、三味線なんか持って乗るの。」

と、客づれの門づけの娘。

いくら美しくても、赤の入った振袖の着くたびれためりんす、目尻にまでぽっっと紅を入れ、三味線抱え、「お兄さん、歌わして頂戴よ」の娘の肩に手をかけて、この浅草の人ごみを歩こうという男だ。生酔いとはいえ、どうせろくなものではあるまい。

「馬鹿言え。三味線なくて、お前なんかと乗るもんかい。飛行機の上から、歌わせようっていうんだ。」

と、娘の細い首に腕を巻いて、ひきずるように。

娘はよろめいて、三味線を杖に突いた。三味線の棹より細い娘の体。少くとも、三味線の棹よりは、脆く折れそうに見える。

もうとっくに、女のしるしの膨らみがついていい年頃ながら、あんまり幼い子供の間から、男達の前に出ていたので、太れなかったという哀れさが姿にただよって。心の絃はたしかにぷつりと切れているらしい。

娘の桃割*から花櫛が落ちた。汚い男の子が拾うと見るや、さっと身を翻して、暗い路地へ逃げ出して行った。これも、末恐ろしい浅草の子供。

明治の終り頃、浅草にあった「観覧車」は、乗っている人間の胸から上しか、見物人に見えなかったという。だからやがて、風俗をみだすというかどで、その取締法が出来たという。そのためだかどうだか、今は空のメリイ・ゴオ・ラウンド*は消えうせて、昆虫館と花屋敷に、廻転木馬が、時世後れの姿をさらしているだけ。

「浅草の繁栄を滅ぼすもの」と、小売商人の、怨みの目を集めている、新築の浅草松屋の屋上には、飛行艇というものが、針金につるされて、空を渡っている。隅田公園と浅草観音とを、左右に見おろして。

だが、その昔の観覧車を思い起させるにふさわしいのは、この遊覧飛行。

昔の箱車が飛行機となったのは、時世の変化、趣向は同じ空のメリイ・ゴウ・ラウンド。

「さあ、お早く、お早く、切符はこちらで十銭、直ぐ空の遊覧に出発いたします。」

呼び声の方へ、引かれて行きながら、門附女*は、

「お花見時じゃないわよ。そんな浮かれた真似、お止しよ。」

いかにも、星のよく見える夜空。空で三味線をひこうものなら、夜風の泣き声とも聞えそうな秋。

「商売じゃないか。空で歌ってみな、飛行機お染とかって、いっぺんに人気が出ら。」
「人気には子供ん時から、あきあきしてるわ。いくら門附だって、歌う場所ぐらい知ってるわよ。」
「歌を歌う場所だって？　おい、かりにさ。お前が出世をして、艶歌師の女房になったとしてみろ。街角や空地に立って歌わにゃならん。今に因果で目鼻もつぶれて、おちぶれたとしたら、橋の袂や道端に坐って、破れ三味線をひかにゃならん。飛行機の上で歌うなんか、一生の思い出だぜ。」
「しつっこいね。」
　と、お染は帯の間にさした、象牙の撥を抜いた。彼女のただ一つの武器。その武器の鋭い角で、彼女の首を抱えこんだ男の脇腹を、突き刺したから、
「痛いっ。」
「あら、酔ってるんじゃなかったの？　痛いってことが分るの？」
　脇腹を抑えてる男を笑いながら、頭を一つ振って、髪を直そうと手を上げると、揮がない。はっとして、帯のなかをさぐってみる。濡れた五円札*の半分はたしかにある。
　さっき小料理屋で、この男の杯を四五杯、さっさと受けると、
「凄い小女郎だ。これでいこう。」
　と、飯の茶碗を突き出したのはいいが、することがきたない。
　五円札を小さく折りたたんで茶碗の底へ、その上に酒をなみなみと、そしてお染を膝へ抱き寄せて。
「まあ、珍らしいお酒。お兄さんいただくわ。」
　息もつかずに飲みほすと、唇にくわえた札を、娘はぷっと食卓の上へ吐き出した。どうせくれるものなら、ちょっとばかり見得を切っても、くれるだろうと思ったので。また、浅草のずっと北寄り、吉原の裏の細民街の家のありさまも、ちらと心に浮んで。
　ところが、男は直ぐにその札を拾って、急に酔いが廻った風に、
「おや、口紅がついてるぞ。酒浸しになって、口紅がついた、なるほどな、金ってものは、こういう風につかうもんか。この手垢によごれた紙屑も本望だとさ。死んでもいいとさ。」
　ゆっくりと札を拡げて、真中から二つに裂くと、
「半分取っときな。」
「いやらしい耳の恰好。」
　と、こういう娘が身に覚えた、年に似合わぬ、底冷たい眼で、男をふと見たが、このまま帰っては、母親や、それから彼女よりずっと年下の門附女達に罵られるよりも、笑われる。破れた札を投げつけてやるよりも、門附女のしつっこさで、残りの半分も奪ってやった方が、男を馬鹿にしたことになるとは、とっくの昔に知っているので。
　男の言うままに、仲見世裏までついて来たのは、そのためだ。裏町の木賃宿までも、つれられて行くつもり。
　ただこの男、どうせ底が見えすいて、恐れることはないものの、札を破るような、筋の通ったならず者には先ず見られぬ、下卑た思わせぶりのために、男を嗅ぎ分けなれたお染には、却ってえたいが知れないのだ。
「飛行機に乗せようと思って、私をつれて来たの？」
　と、お染がしなをつくっての誘いかけを、通じない風に、
「どうあっても乗らないなら。」
「乗らないとは言わないわ。」
「身代りにこいつを貸せ。」
　三味線の棹をぐっとつかんだ。
「なにすんのさ。」
　と、杖をひっぱられた盲のように、お染はずるずると、切符売場の方へよろけて行くよりしかたがない。
　たかだか一人の酔客を扱いかねて、商売道具の三味線を殴されたりしては、身を汚されたよりも笑いもの。
　と、お染のうしろへ*、つかつかと切符を買うために近づいて来た少

女があって、もう夜ごとに秋の深まりゆくのが感じられるころ、まだどこか夏らしい洋装。

無造作な断髪の頭に帽子がない。それが夏らしいというのではないが、化粧のない顔の、なにかの皮をむきたてのような新鮮さが。そうだ、厚い化粧をあわてて落したばかりにちがいない。まだ耳のうしろあたりには、白粉が残っているかもしれぬ。

洋服は秋のもの。だが、よく見ると、どうやら下着が揃っていないらしい、そうだ、靴下なしの素足。くるぶしのあたりに、白いアンクル・ソックス*が、子供のようで、これはいかにも夏。

けれど、少しも薄ら寒い感じはない。少女ののびのびとした暖かさ。

浅草のレヴュウの踊子の風俗である。

踊子はちらっと片眼をつぶって、門附女に合図をした。

踊子のつれの男は、頬のこわばる苦笑いで、

「まだ旅じゃないんだぜ、おい。今から旅の恥のつもりでいられちゃ。子供の乗るもんだよ。」

「浅草の見納めになるかもしれないわ。一度空から見ておきたいの。」

二

踊子はお染達とは一台後の飛行機に乗った。

飛行機は合せて五台。

飛行機と呼ぶからには、プロペラアもある。

プロペラアの音。滑走、離陸、だが、土方風の男が、飛行機の尻を押して歩いているのだ。

「あら、この飛行機のプロペラア、動かないわ、私達の乗ったのだけよ。」

「いんちきレヴュウの千枝子が乗ったからだよ。レヴュウの舞台の飛行機そっくりだ。プロペラアの方で、動くのを遠慮してるんだろう。」

同乗者は四人の子供、いっせいにプロペラアを見て、子供の科学的な興味と虚栄心を大いに傷けられたらしい顔つきで、

「おじさん、プロペラア動かないよ。こんなのだめだ。故障だ。」

と、立ち上って飛び出すと、一台後の飛行機にばらばら乗り移ってしまった。

「プロペラアが止まったら。」

千枝子は口笛を吹くように、

「飛行機は落っこちるんでしょう。」

と、星空を見上げる。

「よく知ってるね。」

「心中ね。青山さんと。」

「千枝子と?」

「驚いたの。心中しようと思って、故障のあるのに、わざと乗ったのよ。」

「浮ばれないよ。千枝子となら、親子心中とまちがえられるのが、関の山だ、浅草のレヴュウが、不況のどん底に陥った結果ってな。」

「私の母さん*が、子供と心中するようにやさしかったら。」

肩を落して、溜息ついて見せるのを、

「僕と心中しなくてもすむわけだな。」

「でも分らないわ。」

と、千枝子はにっと笑って、

「落っこちる瞬間に、きっと抱きついちゃうから。」

「孝行な娘だってことになるね。」

「恋人に見えるようにするわ。」

「どんな風に?」

「いざとなれば分ると思うの。」

「いざとなれば分ると思うの?」

観音堂の方の空を、少女は遠く眺めて、

「寒そうね。」

「そうだね。」

「いやよ、北海道のことよ。もう雪降ってる？」
「飛行機が上まで上ったら見えるだろうよ。」
「旅興行っていけないんですってね。」
「面白いこともあるだろう。」
「女の子には。」
ああ、そんなことを考えているのか、という風に、男はふと肩を抱いてやりたかった。後押しの男達はやっと飛行機から離れた。もう胸の高さに、機械が浮んだので。
鉄骨建築の柱のようなのが、真ん中に一本立っている。その頂上に鉄の枝が出て、つまり、蝙蝠傘の骨組を立てたと思えばいい。傘の柄が鉄の柱で、拡がった傘の骨の尖に、飛行機が一台ずつ、ぶら下っているのだ。
鉄の柱の裾に、トタン張りの小屋があって、そのなかがいわば発動機、モオタアでも据えてあるのか、蝙蝠傘の廻るにつれて、飛行機がだんだん吊りあがってゆくしかけ。
飛行機を主にすれば、円を描きながら空へ舞いあがってゆくわけ。蝙蝠傘の骨にあたる鉄筋には、鉄柱のてっぺんから、青と赤の飾り電燈。
千枝子は男の腕を彼女の胸に、ぐいと抱き取って、
「あら、あら、人間のあの顔。」
と、子供のように、
「ずいぶん間が抜けてるわ。」
柵の外に並んで、飛行機の動く通りに、首を廻している人達を、男も見おろしながら、
「あんな顔で、千枝子みたいな女の子のダンスを見ているのが、見物さ。」
「そうかしら。」
「恋人をこさえたり、結婚したりすると、踊の動きが鈍くなるわけだね。」
「どうして？」
「人間の顔が分ってしまうからね。」
「おかしいわ、そんなこと。」
「人間の顔を見てしまうのは、あんまりしあわせじゃないよ。結婚するにしても、遊覧飛行に乗るにしても、小さい女の子がね。」
「旅興行にゆくことも、あんまりしあわせじゃないわね。」
「旅興行の結婚ってのが多いからな、千枝子大丈夫か。」
「大丈夫じゃないわ。」
なにか胸に飛びこむものを感じながら、男はさりげなく、
「そいつはお楽しみだな。福島か、仙台か、盛岡か、北海道か、直ぐ手紙で報せろよ。」
「報せないわ。」
「帰ってから聞いてもいいさ。」
「帰らないわ。」
「ふうん。浅草落ちをするってんで、急に三つばかり年をとった、そんな風ないいぐさだね。」
「飛行機に乗れば、女も一人前でしょう。」
「一度旅廻りをして来ると、尚一人前になるだろう。」
「空って心細いものね。」
「汽車に乗ったら泣くんじゃないか。」
「私そんなに子供？」
「まあ、僕は、そうとしているんだよ。」
「じゃないの。前に乗ってる、門附の娘さんね、私の姉さんよ。ほんとうよ、青山さん。誰にも言わないでね。いいわ、言ったって。」
千枝子の声はいよいよ鋭さに細って、常にない高い音を出す楽器のように。従って、彼女の言うことは、ひとりごとのように。
「私の母さんも、門附のお師匠さんよ。ちっちゃい女の子を三人家に置いて浅草を廻らせてるの。仲の姉さんも八つの時からよ。女の子は貰いが少いと。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com